ここは雪水　すどう美術館の新しい活動の場
AQUA
NO.36
'14 MAR.
2014年3月発行 35号　すどう美術館
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内373
TEL.0465-36-0740　FAX.0465-36-0739
info@sudoh-art.com
http://www.sudoh-art.com

3つの「あー」に会う旅

手塚 潔

「アート」に会うために旅をするのが好きだ。それは，東京で見逃した展覧会を追いかけて行くのもいいし，その場所へ行かなければならない特別なイベントに惹かれて見知らぬ土地を旅するのもいい。前者は地方都市の美術館を始めとするファシリティやコレクションの状況を知る機会になるし，後者は交通機関を調べたり周遊ルートを考えている時からある種の祝祭に参加する気分になる。ホワイトキューブのような無機質な空間で作品を鑑賞する純粋な経験とは異なり，やはりそのフィールドでなければ成立しえない作品に出会えるのがアートを旅する醍醐味だ。例えば「越後妻有 (1)」における菊池恵「こころの花 (2)」やアンティエ・グメルス「内なる旅 (3)」など，風土や雑生に依拠した作品に出会えることは忘れがたい経験となる。

地方の美術祭はしばしばレジデンシャル・プログラムを伴うことが多いので，必然的に公開制作中の「アーティスト」にも会うことになる。作品と向き合うアーティストの姿は，時にはプライドと不安が交錯するような生身の人間が露呈していて，都会のギャラリーで出会う姿よりも魅力的だ。その意味で，昨年の「原始感覚 (4)」における佐藤香「香の間 (5)」は愛着のある作品と言える。作家が髪の毛まで泥だらけにして刷毛を振るっていた姿が重なってくる。「アートは赤ちゃんのようなものだ」とは北川フラム氏の言だが，作品が産まれ出ずる時を共有してしまったということは，鑑賞者にとっても特別な責務を負うことなのかもしれない。

展示会場となる場所は時に建築家が個性を競う公共施設であったり，また固有の文化に育まれた歴史的建造物であったりする。従って「アート」に会う旅はまた「アーキテクチャ」に会う旅ともなる。SANAAの「金沢 21 世紀美術館」は有名だが，伊東豊雄の「せんだいメディアテーク」や磯崎新の「セラミックパークMINO」も好きな建物だ。また神奈川県立近代美術館における「シャルロット・ペリアン (6)」など展示テーマと建築が相関している時も面白い。

「すどう美術館」への小さな旅も，これらの旅と同じベクトルに乗っているのかもしれない。

(1) http://echigo-tsumari.jp/
(2)http://echigo-tsumari.jp/artwork/flowers_of_our_minds_precious_moments
(3) http://echigo-tsumari.jp/artwork/travelling_inside
(4) http://primitive-sense-art.nishimarukan.com/
(5) http://primitive-sense-art.nishimarukan.com/sa_artist2013.html#kaori
(6) http://www.moma.pref.kanagawa.jp/museum/exhibitions/2011/perriand/

美術評論について

すどう美術館 館長　須藤一郎

先ほど美術評論家の日夏露彦さんが、開催中のドイツの作家、マルティン・フッゼル展を見にすどう美術館に足を運んでくださいました。骨のある評論家で、きれいごとで済ませず「真髄をずばりと突く文章を書いています」「日本の美術・負の現在」ほか著書も多いですが、久しぶりにお会いし、いろいろ情報交換をさせていただきました。最近では日展の不祥事をとらえ、日夏さんは「不正の温床・日展」「名誉とカネとコネに満ちた日展の腐敗の本質」なる文章を発表しています。みなの知っていることなのになぜ、あるいはそれゆえにこそ、それを取り上げるのに、あるいはそれゆえにこそ、それを取り上げるのに挑戦するのに問題ですがきりとえてくれる勇気を持つ評論家もアーティストと同じようにそれぞれ生活があり、それこそきれいごとだけでは生きていけませんが、でも、本質的なことを見失ってはいけないと思うのです。

最近開いた話です。ある画家が美術評論家の先生に個展の案内につける文章をお願いし、謝礼を十万円お支払いしたのだそうです。ところが後日、ほかの画家にも書かれた文章が自分に書かれたものと一字一句違わないほとんどそっくりだったので、その評論家に抗議しましたら、七万円返してきたという笑うに笑えない話があります。三万円分はどうとらえるのでしょうか。

持込みの作品で文章を書いたり、実も見ず、写真だけで文章を書いたりしている況によって止むを得ないこともあるでしょうが、自分で書きたいことを書くべきだと思います。んが、自分で書きたいことを書くべきだと思います。けに世に足を運び、新しい仕事に出会うことをお勧めします。ろん、そういう評論家にもいてほしいと思いますが——。

白いノート 14

高橋玉恵

必要なこと

「次々とホシイモノに出会ってしまって困る」だからすどう美術館には行きたくない」と言いながら、展示が変わるたびに来られる方がいる。きっとここから巣立った作品たちは、嬉しそうに壁にかけられ、楽しい空間になることだろう。

「車やカメラを買うのと違って、何の役にも立たないのに」と思いながら、どうしても惹きつけられてしまうのが「美」である。確かに実用品と違い、作品は役に立たない。しかし日常の空間の中に好きな作品があると、ちょっと幸せになる。そして、時に気持ちが救われることもある。

実用的でないものはどんどん省かれてしまう昨今である。しかし、理屈ではなく心をとらえてはなさない、アートは不思議な力を持っている。そしてそれを感じることは、とても必要なことなのではないかと思っている。

-1-

I'm happy

峰尾大介

ソーセージの下ごしらえ，豚肉を挽かなくてはならない。さっき鶏を挽いたのでチョッパーの目を替えなくてはならない。これがかなり面倒。なるべく取り換え作業はしたくない。頭の豆球が光る。夕方、鶏挽きの注文が２kg ある。チーズ巻用の鶏肉の整形をすればもしや２キロくらい端材が出るのではないか。それを挽肉にすれば無駄なく消費できるのではないか。そのと叫んでガッツポーズ。かなりスケールの小さ目論見はドンピシャリとはまった。Yamos！得なハッピー。なんてったって取り換え作業一回した。

仕事とはハッピーの源ではないかと感じている。人は母親が倒れたから、お父さんが死んだから、旦那が死んだから、子供が死んだから不幸になるのではない。そんなことは誰にでも降りかかる。不幸とは自分が不幸になったと思うことなのだ。可哀そうがられるのが一番の不幸だと私は思うのだ。昔は幸せだったと思い出す暇がないくらい仕事がある現在は不幸だと思う暇がないくらい幸せなのだ。

手を握るあなたと花を待つつもり　氷菓子
春風にどうして私はこうなんだろう　姫代
春の雪緑のある身はやわらかく　稀古

第16回若き画家たちからのメッセージ展受賞展

権容玉展
4月1日(火)～13日(日)
11：00～19：00（最終日～17：00）月曜休館

「若き画家たちからのメッセージ展」を通して初めて個展を開くことが出来、嬉しく思います。私は「植物」をテーマにして制作をしています。植物は私たちの日常にいつも共にあり、私たちの心を癒してくれます。そのような気持ちを基にして私の作品を見た皆さんが幸せを感じとって欲しいです。権容玉

横山洋子展

4月15日(火)～27日(日)
11：00～19：00（最終日～17：00）月曜休館

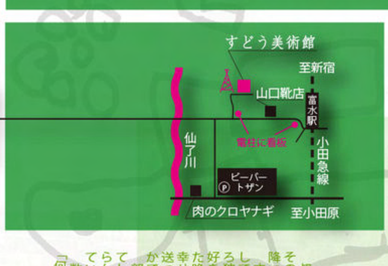
障子紙や習字用紙に彩色した紙、曲線や直線を引いた紙。それらの紙を、ていただいたパネルの上に　張って　張って、心の向くままに楽しみながら出来た作品です。横山洋子

展覧会 info

すどう美術館友の会
AQUA クラブ入会のご案内

入会随時

年会費
一般会員　3,000 円
特別会員　10,000 円
法人会員　50,000 円　入会随時
納入方法　ご来館時または郵便振込みでお願いします
・郵便振込み　No.00270-7-97439
・加入者名　すどう美術館友の会　「AQUA クラブ」



点描

こんな話でよかったら (23)

仙仁司

ずんずん積もり、何処も彼処も覆ってしまうその技は神の世界のインスタレーションか。

この二度の大雪は小宅の辺りも有無を言わせぬ勢いで降り積もり、２月８日は１尺５寸、15日には２尺余りになった。生国山形の山間部では尺を越えて間になるところも稀有ではないが、山形市街は意外に小雪で尺を越えることは滅多になく久々の大雪体験になった。８日は次男の結婚式であったが降りしきる中、難行苦行のうちにも無事終了することができ、15日には今日でなくてよかったと思った。

雪に弱い首都圏のニュースは大雪の被害、交通混乱の話題に溢れ、少なければ紅葉や花と同じく風情のあるものも、まるで悪魔の扱いで喜んでくれる人は何処にもいない。ところでどっこい大雪の手品遣いは街々野原を見事なフォルムの白い巨大な立体作品に変えてしまった。普段は面白くも可笑しくもない唯々ぶっきらぼうな住宅やビルも、無数の車の往来も、雪は人為のなせる全てのアンバランスを消し、不浄を包み、騒音を鎮め、すべてを押さえ込み、東京などは実に荘厳な芸術作品となった。その圧倒的な力に打ちのめされた。ふと気が付けばこれまでは対極にあったり、見向きもせず、避け続けてきた大雪がまるで異なって見えてきた。見直すとか考え直すということは、まるで正反対の世界を美意識の中に取り込むことに他ならない。

厄介者呼ばわりされ続けてきた雪に少々申し訳ない気がしている。すっかり雪は溶けて、東京の元の巨大な雑踏の場に戻ってしまったが、雪の芸術の荘厳さはそのままじっかり眼に残っている。

-2-

絵とはなにか

いまさら絵とは何かというのも変であるが，絵についてちゃんとした定義があるわけではないように思う。

現代アートや大きな作品は額なし展示するこもあるが，しかし，作家も見る側も，絵とは額や枠の中に閉じ込めて表現，鑑賞されるものと考えている人が多いように思われる。私は作家の方々に額や枠の概念にとらわれず，それを超えてどれだけ自由に自分の表現したいものを表現するかということが大事ではないかと感じている。

絵には空間，余白といったものがあってほしいと思っている。

いわゆる完成度の高い絵を見ると，すごいなあと感じるが，一方通行の受け方で終わってしまい，こちらから反応することができない。見る人がその絵と対話できる作品，見る人，そして空間や余白の部分に，見る人が好きで，絵が好きで暮らしていた人が，部屋の中に好きな絵をとこ ろ狭しと掛けて楽しんでいた人が，絵が好きで，静かに暮らした晩年であったが，些細なことでも幸せ，幸せと，いつも感謝の日々を送っていた。その旅立ちの顔は穏やかで美しかった。

部屋を片付けているといなくなってしまった叔父さんが懐かしく，数年前に作った句のようである。

「何事も無きがごとくに雪が降る」

よま　須藤紀子

叔母がとうとう死んでしまった。

その２日後日本中に記録的な大雪が降った。

すどう美術館の活動をから応援してくれ，部屋の中に好きな絵をとこ ろ狭しと掛けて楽しんでいた人が，絵が好きで，静かに暮らした晩年であったが，些細なことでも幸せ，幸せと，いつも感謝の日々を送っていた。その旅立ちの顔は穏やかで美しかった。

部屋を片付けているといなくなってしまった叔父さんが懐かしく，数年前に作った句のようである。

「何事も無きがごとくに雪が降る」

よま　須藤紀子

編集後記

絵とはなにか

るに描く人と見る人の二人で作品を作り上げるということである。もっとも，ただ見ているだけであっても，その重要性を意識しているかしていないかで，その作品には空間や余白がかなり違ってくると感じられる。杉本裕子の作品にはその西宮在住の杉本裕子の作品にはその